

「災害ボラセン、その後。～復興について学ぶ」報告書

災害直後には災害ボランティアセンターに何千人、何万人ものボランティアが駆けつける状態に象徴されるほど、被災地に多くの関心が集まるが、時間とともにその現状は忘れ去られる傾向が強い。しかし被災者にとっては、むしろ復興期のほうが時間的にも圧倒的に長く、経済的にも精神的にもかかる負担は大きい。本学会では復興の実態を過去の被災地から学び、そもそも復興とは何かを探求しながら、復興期の支援のあり方や次の災害に対する心構えについて考察している。本シンポジウムでは、2008年の岩手・宮城内陸地震で生活の多くを失い、現在も復興に取り組んでいる被災者らを招き、その課題を研究者やボランティアとともに議論。今後の支援のあり方について意見を交わした。



日時 2009年12月3日(木) 18:30～20:30

場所 TFT（東京ファッションタウン）ビル東館9階会議室

主催 日本災害復興学会復興支援委員会

共催 中央共同募金会

後援 全国社会福祉協議会

参加者 各地の社会福祉協議会職員を中心に約120人

プログラム

1. あいさつ 木村拓郎（復興支援委員長）
2. 基調報告「岩手・宮城内陸地震からの復興に向けて」
大場浩徳（くりこま耕英震災復興の会）
聞き手：稲垣文彦（復興支援委員）

<休憩>

3. シンポジウム「災害ボラセン、その後。～復興について学ぶ」
▼パネリスト
宮下加奈（三宅島被災者・復興支援委員）
君嶋福芳（災害ボランティアオールとちぎ）
渋谷篤男（全国ボランティア活動振興センター所長）
▼コメンテーター
山ロー史（復興支援委員）
▼コーディネーター
上村靖司（復興支援委員）

4. まとめ 山中茂樹（日本災害復興学会理事）

※総合司会／栗田暢之（復興支援委員）



主催者あいさつ

木村 復興支援委員会が正式に誕生したのは今年1月。きっかけは昨年6月の岩手宮城内陸地震で、学会として現地に入り、意見交換させてもらい、もっと長期的に応援するような場をつくらうと



委員会を立ち上げた。とりあえず今は6人でやっているが、災害直後のボランティアセンター運営まではだいぶ形ができてきたが、何となく軌道に乗ると消えているというのが現実ではないか。一方でいろんな法律や砂防などの専門家がいて被災地を応援したいという人がいるが、そういう人の出番がつかれていない。私は専門家をこき使うようなグループができるといいなと思っている。きょうは皆さんに初期のボランティア活動から専門家を引っ張り込むような「つなぎ」の知識をつけてもらいたい。その一つがパンレット「被災したときに」。今はネットに情報があふれているが、70、80のおばあさんにホームページみてというのは無理がある。生活再建ってどうしたらいいの、と悩んでおられるかたに簡単な初歩的な知識を活字にして、被災から生活再建の流れを知ってもらおうとつくった。事後でなく事前に頭の中に初歩的な知識を持ってもらって、そのうえで専門家をうまくつないで、復興までがスムーズに進むといい。

栗田 復興支援学会は2年前に発足され、開かれた学会をめざそうと研究者のものだけでなく、ボランティアを含めて市民を巻き込んだ活動をしなければならない。この学会をきっかけに復興について考えませんか、と呼び掛けたい。「復興」の

定義がきちんとされていない。相次ぐ災害で復興の途上にいる人たちがいっぱいいる。阪神・淡路大震災から15年だが、神戸が復興を遂げましたかと言われるればそれぞれの考えがある。できるだけ多くのかたに参画していただいて議論に加わって復興を考えようというのが今回の趣旨だ。

基調報告

「岩手・宮城内陸地震 からの復興に向けて」

稲垣 岩手宮城内陸地震の復興に向けてということで、くりこま耕英復興の会の大場さんに基調報告してもらおう。まずは自己紹介を含めながら現状を。



大場 昨年6月14日までは耕英地区で農業と日帰り温泉、イワナの養殖をやって生業を歩んでいた。耕英地区は岩手県と宮城県の県境にある栗駒山の中腹、標高600メートルぐらいのところにある。栗原市の中心部から25キロ。私たちの生活の場は標高600メートル。私だけでなく農業やイワナの養殖、旅館を営んでいる人が41軒、別荘をもっているのが5、6軒ある。

イチゴが真っ赤に色づく季節。出荷の話や懇親会をして、あしたからイチゴが売れると朝からビールで乾杯していた。そこで8時43分を迎えた。

何が何だかわからず、上のほうに飛ばされ、ちょうど目の前にイワナの養殖池があったが、まっすぐ水がたたきあげられているという状況と自分が宙を飛んでいるという状況がしばらく続いた。栗駒山が全体に2メートルぐらい上がったのではないと言われていた。後で測量したら岩手県側から宮城県側に10センチずつ移動したという話がある。

家族の安否を確かめながら家に帰った。耕英地区は電気が一瞬にして止まった。ご飯を食べてみんな畑にいる時間で、家の中にいた人は少なかったようだ。駒ノ湯温泉という温泉宿の中にいた人だけが惨劇を受けてしまった。行政のほうから避難勧告と言われてその意味もわからなかったのだが、残ることはできると聞いて子どもとお年寄りがヘリコプターで避難。私たちはイチゴとイワナの養殖で生きているので、その地を離れるというのはそれができなくなる。私のほかに34名が残って自力再生しようとした。しかしやがて栗原市から避難勧告が指示になるから下りてくれと言われ、何時間か押し問答になった。そこを離れたら生活はできなくなる。イワナの養殖の人たちも何万匹も殺すわけにはいかない。そのとき収入役が生活の支援は十分にすると約束したので私たちは山を下りた。

耕英地区は冬は1、2メートル雪が降るが、冬も山にとどまる人たちが14軒、50メートルぐらいのところを下りるのが23軒。下場で家を持っている。仮設住宅に入ったのは14軒しかいない。花山地区は40数軒。避難所ができて1カ月ぐらいは自衛隊の人たちからの支援で、食事もお風呂も至れり尽くせり。ヘリで下りてきたので車もない。ボランティアセンターから車を借りることもあった。ボランティアに支援をしていただいたが、山に戻ると片付けなどがあり、それが本当のボランティアの仕事だと言われた。

栗原市としてはボランティアは被災地に入れなという話だったが、生業の支援の問題が出てき

た。米だとその年に収穫できるが、イチゴはまず苗を準備しないといけない。苗がないと来年につながらない。何とか苗とり用の苗だけは植え付けたいなど。

一時帰宅が1時間程度しかなかったが、そこでボランティアに手伝ってもらえないかと電話したら、もう担当者が変わっていた。その担当者が1



日何時間ボランティアすればいいのかと聞いてきた。でも耕英地区はいったん入ると夕方まで出られない。そういうことだと花山は午前中2時間というような形なのでできないと言われた。

そのときは電話ブチッと切ってしまった。でも、そのとき支援してもらって自分たちの復興計画をつくったりして1年を迎えられた。

稲垣 すさまじい。こんな地震が来るとは予想していなかったでしょう。

大場 前の宮城県沖地震のときには鍋のふたがパタッと落ちるくらいだった。耕英地区は地震では何ともならないだろう、被災するなら火山噴火だろうと話していた。

稲垣 ほとんどの人の勤め先がわかっているのはびっくりした。食べていく糧が耕英地区でないと稼げない。結局そういう状態が1年近く続いた。

大場 夏場に本業をやり、冬場は土木作業などでおかず代程度を稼げれば何とかなる生活だった。

稲垣 そこでイチゴやイワナを育てて生計を立てていた。そこに危険だから来ないでということになった。収入はどうなったか。

大場 がんばってがんばって4分の1というところ。ほとんど家の修復で終わっているような人もいる。

稲垣 ほとんど収入が途絶えてしまったというのが現実で、まさにそこが課題。

大場 これも天災で、国が悪いわけでもない。昨年7月に山古志村長の長島代議士が復興の会を立ち上げたときに講演に来た。皆さんは1カ月ぐらいは夢を見ているが、だんだん現実がのしかかってくる、現実って被災者には本当に冷たいものだと言われた。その言葉が今でも忘れられない。支援は100%あると思っていたが、それは避難所にいたときまでだった。仮設住宅に入って罹災状態で半壊ぐらいの人には援助があるが、一部損壊程度なら何も無いに等しい。

稲垣 義援金の配り方が家の壊れ方に応じて配ってしまう。何を想定しているかというところサラリーマン世帯。耕英では家に被害はなかったが、仕事ができないという被害が大きかった。たぶん仮設のときもあすはどうなるかという気持ちだったと思うが、そういうときにこれはありがたかったという支援は。

大場 被災したときの心の持ち方や、行政とはけんかしないほうがいいよなどという言葉は頭に残っている。被災者がいろいろな人に対応する窓口をつくって行政とも話をする体制をつくらなきゃいけないとも言われて、復興の会をつくった。車座トークというイベントも開いてもらって、耕英って噴火で避難したのと同じだよねと言われて三宅島の宮下さんに経験を聞いた。離職した人にも義

援金を配分したことや風評被害の対策費、ボランティアの油代など。私たちも失業した人と同じような支援があるのかなと思ったら、農業は事業主なのでそういう支援、義援金の配分はないと言われて悔しい思いもした。いろんな情報もらったが、行政からすれば“悪知恵”を入れられてるのかなと見えただろう。アドバイスくれながら応援してもらって本当にうれしかった。避難所の横で焼きそば焼いている人もいれば、その横で餃子焼いている人もいた。昔ヤンキーだった若い衆が避難所で自由に食べられる場所を提供してくれるなど、本当にいい人たちにかかわってもらった。

稲垣 義援金の話では、三宅島も4年半の長期の避難だった。ここも離れて仕事ができなくなった。東京都が災害保護という長期の制度をつくった。もともと雲仙がたばこの農業ができなくなって生活費にお金を入れようということがあったが、三宅以来それがなかった。しかし大場さん、災害の制度に詳しくなっていてびっくりした。

大場 木村先生に初めて会ったとき、「みなし全壊」という言葉を聞いた。もう英語みたいな言葉だった(笑)。

稲垣 くりこま耕英の人たちが市社協と掛け合っていて、壊れた家に対する義援金を長期の避難にも出しましょう、ということに苦節7カ月かかった。今後の支援や期待することは。

大場 お茶飲み会のお知らせが広報されたとき、これって災害ボランティアなのかなと思った。でも今になればじいさんばあさんのお茶飲み会ってあってもいいのかなと思う。次の被災者にどうのということとはできないが、宮下さんが私たちに教えてくれたようなことを次の人に伝えられたらと思う。後は毎年6月14日をどう過ごすか。

稲垣 仕事の再開は来年が勝負でしょう。来春イチゴを植えると観光客も来る。皆さんぜひ来年、栗駒におじゃましてください。来年だけでなく、ずっと来てください。仙台学という資料の中で熊谷さんという開拓3世の人の話がある。最初会ったときは声が掛けられなかったが、今では耕英でやり直そうと思っている。こういう方々を何とか支援していきたい。

会場に駆けつけた室崎益輝学会長のあいさつ



今の大場さんの話を聞いて少し救われた気がした。災害復興学会は議論するためではなく、被災者の復興に力になるため。ほんのちょっとだけ役に立って学会つくってよかったと思う。でもそれで満足するの

でなく、しっかり被災地の支援をしていきたい。今後ともご協力を。

シンポジウム

「災害ボラセン、その後。 ～復興について学ぶ」

上村 復興というなかでボランティアが被災者にかかわりながら少しでもお役に立てるかという話をしていきたい。支援委員会の正体が大場さんの話でわかってもらった。お金がないので“悪知恵”をつける(笑)。何とかスムーズに悩んだこと苦しんだことをつないでいきたい。災害ボランティアという形で社協のかたもほぼオートマチックに被災地に入る。仮設住宅に入った後もいったん閉まるが、これで終わりではない。災害ボラセ

ンが閉じた後の流れも含めて議論を。

渋谷 ボランティアセンターができたときと復興のときと何が一緒で何が違うかを話したい。地域福祉やボランティア活動は一言で言うと「つながりの回復」。災害はまさに「つながりの破壊」。そもそも外部の災害ボランティアがなぜ受け入れられるのか。自分が厳しいめにあって孤独感を感じているときに、みんなが心配してくれているというのが一番のポイントではないか。人と人がつながっていることを実感できる。もう一つは制度外のニーズへの対応。被災者支援は制度では対応できない、対応しづらい問題が多い。そこを多くの方々が直感的に感じて飛び込んでくる。

復興の取り組みをイメージすることが大事。孤立している人は必ずいる。そういう人に個別に積極的に対応する。ただ、つながりを本当に回復するには地域の力が必要。外部では限界がある。災害が起きてから何とかしろと言われても、通常ができていなければできない。通常の福祉ができていないところでは、そもそも復興といわれてもピンとこないのではないかと。そこに外部支援の意味がある。私どもとしては災害をきっかけに地域福祉に取り組むということ。そのためには体制づくりが必要。お金もいる。

先ほどの話で、生業支援というと災害ボランテ



ィア活動のなかでは少し別物という意識があるのかもしれないが、実際その人が困っているのなら対応していかなければ。地域福祉を考えるのならば農業をどうするかが非常に大事。栗駒の場合も単にお金の問題だけでなく、地域を成り立たせる

ためにどうするかを一緒に考えたい。

上村 もうほぼ結論めいたお話になってしまった(笑)。つながりの回復など、冒頭から結論を出していただいた。個の回復、住宅再建みたいな話がものすごく当たり前の中心だが、あえて人間関係の回復というところに焦点を当てられた。確かにコミュニティーをバラバラにして復興住宅に入れるなどはとんでもない話だということが当たり前に思えてくる。地域を成り立たせるという観点では、そこに人が住んでいて生業をやっていてなんぼという話なので、まさに線の引きにくいところ。それがなければ地域が成り立たないという重要な指摘をいただいた。



君嶋 この会場の壁に飾ってある写真は岩手・宮城内陸地震の花山地区の仮設住宅。花山にはダム湖があって、そこからの風がまともに仮設住宅に吹き付けてくる。雨が降ると軒先までびしょびしょになる。それをどうにかしたいということで、風よけをつくろうと MDRC という宮城のボランティアネットワークと一緒にやったボランティア活動の写真。ちょうど1年前だと思出す。

うちのグループの取り組みを紹介すると、災害直後のボラセンと連携した活動も行うが、その後を重視している。

阪神・淡路大震災が NPO 立ち上げの一番のスタート。11 年前に那須で大水害があった。そのときに初めてきちんと組織だった災害ボランティアセンターを設置した。その中核を担った那須町の社協と町の若手と3者で運営した。

一番特徴的なのは災害後、現地に支援員を駐在させるという取り組み。新潟県中越地震では川口町の和南津という集落に2004年12月から半年間、職員2人、といってもたまたま職のなかった若いのを住ませ、とりあえず地元の人とかかわれと置いたのが始まり。

それから岩手・宮城内陸地震では2008年9月から3カ月間、1人常駐させ、現地でまず関係づくりをして何ができるかを見つけ出していこうとした。

和南津では住民の方との関係構築で非常に苦労してきた。やはり農村部だといろんなしがらみもあり、最初の1カ月ぐらいは住民とまともな話ができないというところから入っていった。そこで外部者の視点を入れて、復興に向けて何ができるかを住民自身で考えてもらおうと、一緒に取り組んだことの1つがソバのオーナー制。毎年必ずここに来て、外部の人たちも継続できる仕組みをつくろうと考えた。

もう一つは「かわぐちセット」という地元の農産品やおいしいお酒を段ボールに3000円分ぐらい詰めて、プラス150円を地域支援の寄附金にしてと販売した。正直あまり広がり



はなかったが、地元の方々に意識づけをすることも大事だった。

それから川口町の木沢という集落に非常にきれいな棚田があるが、地震で崩れて作付けができなくなった。もう無理してやらなくていいよねという意見もあったが、何人かに声を掛けて実現したのが棚田のオーナー制。1組4万円という参加費だが、年間通して月に1回は必ず行けるような仕

組みをつくっている。指導者は地元のおじいちゃんたち。

岩手・宮城のほうは9月から12月まで、仮設住宅のすぐ近くに空き家を借りて支援員を常駐させた。そこで生活することで被災者と関係をつくりながら、毎週日曜には仮設だけでなく、自宅にいる人も含めてぜんぶの被災者が集まれる日を「カレーの日」に設定した。いろんな方たちの力もあり、みんなで復興ビジョンをつくろうという意識づけができた。そこに復興委員長の木村先生もアドバイザーで来てもらって、復興に向けた共通認識をいかに共有できるかを主眼にした。具体的な復興はこれからなので、どう取り組んでいくかが問われていく。

上村 さらに聞くと、ただすごいなと思えるが、よく考えると皆さんちゃんと仕事があって、それぞれの立場もあって、それがこれだけの長期間にわたってずっとつきあっている。先ほど渋谷さんからつながりの回復という話が出たが、つながりをもともと回復するものがない外部の人たちだから、つながりを関係づくりから入らなければいけない。そしてつながりを深めるためにいろんな場をつくっているというようなことが伝わった。

宮下 大場さんに悪知恵を与えた宮下です(笑)。三宅の災害は約20年の周期で噴火が起きている。そのたびに復興事業と言ってきたのだが、どちらかと言うと復旧事業に近かった。私も2度の噴火を体験した。1度目はまだ子どもで、自分の住んでいた家も学校も溶岩に埋まるという被災を受けた。そのなかで、大場さんの話でも出たが最近の地震災害は生業を離れた場所で長期化するということでは噴火災害にかなり近いところが出てきていると思う。何が一番の問題かという、生業ができないことで地域に戻れず、復興に着手できない。復興が遅れば遅れるほど周りから忘れ去ら

れ、被災者もモチベーションが下がってしまう。すると税金をたくさん投入してもそこに戻る人がいなければ何の意味があるんだ、という堂々巡りの議論が常に起きてしまう。当然、人口も減るし、生活が成り立たないのでそもそも復興にならない。



特に三宅の場合は4年半という長い間、島を離れて都内で生活を送った。他の被災地だと仮設住宅を建て、人の目を盗んで元の家に帰ることができるが、三宅の場合は物理的に船に乗らないと帰れない。そんな状況で4年半もいたら、生業を再開したいと思っても元に戻れない。当然の生活をするために東京で新たな仕事を探さなくてははいけない。そうすれば島に帰ることを断念する。島に帰る人が少なくなれば復興もできない、という悪循環になっている。

それから「支援する人を支援する力」や、私のような被災者があらためて被災者を支援し、心の支えになってあげるといことも大事。

生業支援はお金の話になってくるので公的支援は難しいと思うが、精神的にできることがある。皆さんを支援する気持ちを常に持っていて、支援の手をさしのべるということにあるのでは。

上村 災害直後はまず生きなきゃとカーっとなっていて、だんだん明日のことや一週間後のことや来年のことを考え始めるのだが、来年がイメージできない。生活再建をどうするか、支援金が出るような出ないような、何となく情報は流れてくるけれどいったいいくらなんだ、出ないなら出ないで早く言ってくれよ(笑)と、とにかく未来がまったくイメージできない苦しさ。三宅なんて典

型で、いつ帰っていいと言われるかまったくわからないから計画が立てられない。大けがした人間が入院するとリハビリに時間がかかるが、よくよく考えると大けが以前に持病が問題だった。持病も治さないともとの生活に復帰できない。中越なんかは過疎や高齢化などの持病の部分が吹き出した。50世帯が30世帯になってしまったというなかでどうやって新しい地域づくりをしていくか、という喪失感をとちぎの皆さんのようなかたが埋めていっているのかなと思う。支援する人も疲れる、へこんでしまったりする。

宮下 特に地元で活動されている社協のかたは一人ひとりの生活の状況がわかって、その人の気持ちになりすぎてしまう。ありがたいことだがそれが心の負担になってしまう。支援する側がづらい立場になって傷ついてしまう。

上村 被災者からすれば「私のことを本当に理解してくれている」と思うだけでものすごく気持ちが楽になるんだけど、支援者はそれだけ受け止めている。支援者の支援の会をつくりましょうか。支援者の心のケアをしていただかないと。

山口 渋谷さんはつながりが壊れてしまうと言われるが、私も同じように「暮らしの循環」が壊れてしまうと思っている。循環が壊れてしまうからその円をつないでいく作業をみんながしている。災害ボランティアセンターと復興がどうつながるかという、水害だったら泥出しをしたり家財の片付けをしたりということがあがるが、それが目的ではない。目的はそういう循環をつなぐための第一歩でまず泥だしをしましょうということ。

そう考えるとその地域でどんな暮らしが実現していたかを知っているのはやはり地元の社協のかた。その人たちが実際にどういうふうに出しをしていくか。実際は個別の情報を出しにくいだろうが、そういう心構えが大事。

課題というのは透明のパイ生地のように積み重なっている。阪神のときは高齢者の孤独死があったが、そこからコミュニティーがつぶれているという課題がめくれてきた。災害のたびに新しいパイ生地が見えてくる。それはもともとなかったのではなく、上をのけたから下のが見えてくる。

災害のたびに被災者も支援者も一つずつ物事を解決してきた。物事を解決する視線を少数者に注ぎ、その少数者を多数者のほうへ寄せていくという活動をしてきた。中越沖のときに介護士が常駐する福祉避難所という仕組みが実現した。いろんなことが実現するが、その情報を全国にきちっと発信しなくては。次に災害が起こったときに出発



点はここからですよという情報や気持ちを持っていないと、先人の努力が無駄になってしまう。

そういうことを考えると、災害ボランティアセンターでその日その日のマッチングも大事だけれど、その人に会うのはこういうことなんだとお互いに確認して、考えながら動いていくのが大事かなと思う。

上村 ほぼまとまっちゃったような気がする(笑)。暮らしの循環の修復というのは素晴らしい。地域を成り立たせることを考えたときに、個々の再建案もつながりの回復も当然あるが、生業も含めて元あった暮らしの途切れてしまったところをどうつないでいくのか。それから“悪知恵”と悪い言葉使ってしまったが、一から悩むのではなくて、情報と経験のバトンをちゃんと渡すということが、人によっては悪知恵と見えるだろうが、や

っぱり悩んだ結果出てくる知恵。被災を経験したかたなら誰でも同じ経験をしてほしくない、同じ思いをしてほしくないと思う。自然が相手だからしょうがないんだけど、でも何とかなるんじゃないかということがいっぱいある。そういうことをちゃんとバトンを渡していってもらえればというお話だった。ここで会場から質問や意見は。



会場参加者 新潟の川口町が災害ボランティアのデビューだが、本当に遊びに行っている。私自身が何をしているわけではないが、手ぶらで行ってご飯ごちそうになって酒飲ませてもらって布団まで提供してもらってお土産もらって帰る、という関係を続けてもらっている。

上村 そういうことがまさに復興ボランティア。どちらもうれしいという WIN-WIN の関係。きょうのテーマにあるように中長期、ある種オートマティックにどうしようもない状況を支えるために制度のすき間をうまく埋めていくというところは確かにある程度形になってきた。だが中山間地がもともと持っていた課題や持病みたいなものが出てきてしまったのを直しながら暮らしの循環を直していくというプロセスにおいて、長期的に一緒に歩んでくれるボランティアがいてくれると本当にありがたいということは誰も否定しないと思う。ただ、現実的に考えると、とちぎさんほど熱心に人を常駐させると人の手当てもそうだしお金もかかる。こういうものをどうしていったらいいか。

君嶋 どう継続するかは人とお金の問題。実際うちのような NPO 法人はいろんな分野に手を出

していて、災害ボランティアは4つある柱の一つ。動いている人間は10人。私も仕事を持って休日中心でやっているボランティアスタッフ。岩手・宮城の大場さんのところなどは一年間で30何回通っているけれど、場合によっては平日休みを取って、片道4時間かけて日帰りという通い方をした。

人を育てていくという部分では引き込まなくてはいけない。私などは自分の職場の若い連中を半分強制的に連れて行くなど、少しずつ人を増やす努力を普段からしているが、なかなか増えない。お金の問題は大きくて、今回、岩手・宮城でも7ケタのお金がかかっている。このためにいろんな社会貢献の財団などにアプローチしたり、県内の JC に強く働きかけたり、経営者協会に声を掛けたりした。それからできるだけ地元の新聞社と良好な関係をつくっておいて、新聞にマメに出してもらおう。これは結構バカにならなくて、名前を売っておくとその後災害が起こったときにあの団体がやってるならちょっと行ってやろうということで人の確保にもつながる。

上村 知名度、信頼は社会のなかで相当努力して得ていかないとなかなか難しい。人については、中越では「たらかす」というが、だます。一緒に来いよと言ってその気にさせるという努力をしなければいけない。

渋谷 オールとちぎのような活動は素晴らしい。そういう力を持つてる NPO をうまく地域につないでいくこともある。社協で地区担当を明確に置いているようなところでも、なかなかそこまではできない。やっぱり外部の力を借りてやっていかざるを得ない。ただ、社協が手厚い支援を仕切れないということはあるが、つまらない非難の応酬からは脱したい。そこは建設的に考える必要がある。それでもやっぱり社協として、福祉関係者としてどうしてもやっていかなきゃいけないのはマ

イノリティーの問題。それも要介護や知的障害というよりは、孤立、孤独死のような問題。それだけはきちんとやりましょうということにしないといけない。そこまでやればオールとちぎさんのようなところと接点ができてくるし、お互いの役割分担も生まれてくる。

上村 マイノリティーといいつつも結構な数が出て、一人ひとり丁寧にケアするだけの人がいるかどうか。NPO がそういう人を網羅的にカバーできるわけではなくて、やっぱりこの地域に、と重点的にやらざるを得ない。どういう形であってもリソースに限界はある。そこで普段からやれることをどう積み上げるか。なかなか答えはないが大事な提案をいただいた。

宮下 特に財源は簡単に答えが出ない。一般市民的な立場で考えると、いつも誰かが見守っている、いつも誰かが忘れずに思ってくれているという思いを被災者が抱くことが一番重要。被災地一つ一つを忘れないという思いに立って声を掛ける。

栗駒もこれから復興していくとそれを見に来るかたがいっぱい来る。観光の目玉になりますよ、と声を掛けられてがんばれる被災地もある。単純なことだと思うが、そこに行ってがんばっている人たちを見てほしい。そこでお金を落とすことが支援になるし、たくさん人が来ることで地域ががんばれる。実際に三宅でも救援に行ったことがきっかけでその地域が気に入って住み着いてくれた人がいる。それが地域が元の力を戻していくきっかけづくりになる。

上村 ときどき思い出してもらっただけでもうれしい。一緒にお酒飲んで農作業して。ひょっとしたらお迎えするためにお金使っちゃってるかもしれない。でもうれしくてしょうがない。そういう人が来てくれることで行事やるにもやりがいがある。年に1回でも来てくれることがその地域にと

って宝物になる。

君嶋 被災地にかかわって思うのは、地域そのものが一生懸命取り組もうという気持ちがあれば絶対動かない。そこで各地域のキーマンが活躍できる環境がないとだめだとつくづく思う。一生懸命自分の仕事そっちのけでがんばっている人がいる。そういう人たちはある意味矢面に立つ。そこを支援していくのは外部だけでは難しい。場合によってはブレーキをかける役目もない。そういうところで地域の社協がかかると非常にやりやすくなるのでは。

上村 まったく同感。まずキーマンがいるかどうかということもあるが、キーマンの大場さん。

大場 私は全壊だったが、一部損壊の人たちに対する支援はぜんぜんなかった。でも、まず私たちがヘリで生活の場とは切り離されたところにいるという根本のところを一番支援してもらって、その次に家の損壊を支援してもらおうということにしてもらわないと。そういう中で外部の支援者に助けてもらう。君嶋さんのところのカレーも、「毎週カレーじゃ飽きるよな」なんて声もあったが（笑）、私は家族連れて毎週ごちそうになってる。せっかく来てもらって数人かしかいないと申しわけないねと言ったら、好きで来てるんだから気にしないでと言われた。本当にその気持ちはありがたかった。

上村 被災者のためにある制度が、微妙な被災者間の関係を翻弄させていたり、引き裂いてしまったりすることもある。そういうことを含めて宿題を解決しなければいけない。

さて、ちょうど時間が来たが、特にまとめず、それぞれに皆さん刺激されて、それぞれにもやもやとした気持ちをお持ち帰りいただければ。

まとめ

栗田 お聞きの通り、復興は本当にもやもやとしたもの。その現場現場で携わるとわかるが、こういうシンポジウムになると復興って語りにくい。ではこういう取り組みが今まであったかという、ボラセン後の復興となるとマスコミも撤退してしまってわからない。それじゃいけないんじゃないか、という仕掛けを今回試した。

山中 今「2012年」という映画がヒットしているらしい。こういう災害映画はハルマゲドンで終わってしまうが、実際の災害はそれで終わるわけではない。被災者にとってはその日からスタート。つながりの破壊という言葉も出たが、被災はもちろん、実は復興の過程でもつながりが破壊されることがある。被災するとお金持ちも貧乏人も同じ地平に降りてしまうなかで一種のユートピアが生まれるのだが、次第に格差が生じる。日本の制度は自力再建、自助努力だったから、力のある人はどんどん暮らしを修復していくけれど、それができない人はどんどん取り残されていく。阪神の後でもまったくそういう制度がなく、復興の格差が生まれてきた。

そこで被災地の人たちが頑張ってゼロから制度を勝ち取ってきた。そして暮らしの循環を何とか回復させようとしてきた。神戸で2年目に「被災者責任」という言葉が生まれた。それは被災して生まれた知恵や教訓を全国の人たちに伝えよう、分かりやすく語り継いでいこうという意味だった。そのために僕たちは学会をつくってやっている。1月10日には被災地全国交流集会も開くが、それ



は全国の被災地の知恵を引き継ぐために、全国の復興リーダーに集まっていたいで知恵の共有をする。同時に宮下さんが言われた「支援者を支援する」人たちも育てていく。被災地で孤独な闘いをしている人たちを支える受け皿にもしたい。

君嶋さんからは棚田オーナー制度の話が出た。災害というのは地域や社会の脆弱性を顕在化させる。中山間地の問題が浮き彫りになる。そこでもう一度中山間地をどうやって活性化していけばいいのかを考える場にもしたい。それは簡単な話ではなく、この国の構造自体を変えなければいけない。そういうところにわれわれがどうコミットしていくか。それは頭で考えるだけでなく、現場で君嶋さんのような人がどのような実践をして新しい知恵を生み出していくかということにかかっている。中越と東京が結ばれ、いずれやってくる首都直下地震のときに、新潟が今度はどう受け皿になっていくか。そういう復興リーダー、支援者の輪をつくっていききたい。皆さんもその輪に加わっていただければ幸いだ。ボラセンが解散した日が災害の終わりではなく、そこからスタートすることを経験したことをきょうのシンポジウムで学んでいただいて、今後ともわれわれと歩みをともにしていただければありがたい。

木村 実際に皆さんの地域で災害があって、自分が何をすればいいのかというときに、通常の業務の延長線上で、マニュアル通りにやろうとすると決してうまくいかない。そうではなく一人ひとり生活復興、地域の復興をどうすればいいのかをまず頭に描いて、そのために自分は何をしたらいいのかというところから入っていただかないと。ガイドライン、マニュアルにこう書いてあったからと、そんな生やさしいものではない。ちょっと頭の固い理事長がガーガーいうかもしれないが、その辺は内部で聞いていただきつつ、復興に取り組んでいただければ、ということをお願いしたい。